台大日本語文研究第 8 期
2005 年 6 月，頁 59-92
本文 2005. 4 30 收稿，2005. 5 26 通過刊登

從位相論的觀點對「騙す」之相關類義語群進行考察及意義分析

謝豐地　正枝 *

摘　要

首先，從認知意義論來檢視「騙す」這個單字，並且抽取出其概念之「prototype（原意）」，藉此來設定「騙す」之中心意義領域。第二步則是找出和「騙す」有類義關係的 26 個動詞，由這 26 個動詞來組成「類義語群」。然後更進一步找出和類義語群的意義有關係之複合動詞、關聯語、慣用語、方言等 37 個語句來組成「關聯語句群」。然後第三，再從剛才取出的 26 個類義語群中，選出「騙す」的主要類義語，也就是「欺く」「たぶらかす」「ごまかす」「まどわす」「計る」「陥れる」「たらす」等七個單字，然後分析比較「騙す」所表現的原意和以上六個單字的原意。由比較分析的結果可得知「騙す」所表示之意義領域，和它主要的類義語群所表示之意義領域，兩者的共通處以及非共通之處。

第四點，不只是依照不同的意義系統將和「騙す」有關聯總計 54 個類義語群以及關聯語句群進行範疇分類，也從位相論的角度，依據意義系統上的不同分編範疇領域，除此之外也設定文章用語、口語、日常會話用語、用在不同的場合的男性、女性、中性等用的性向語、以及方言等範疇來進行分類。然後再以位相論的觀點來考察每個單字的嚴謹程度之高低。然後那些和「騙す」有關的各個類義語以及關聯語、關聯語句，在意義上又有什麼樣的相互關係也將會是我檢視的重點。

關鍵詞：prototype（原意）、意義構造、意義特徵、類義語、位相論

* 台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Semantic Analysis on “prototype” and Semantic Structure of a Japanese verb ”deceive” and Synonyms for the word “deceive”, and Categorization of These Synonyms by Applying Topological Theory

Hsieh, Masae Toyochi *

Abstract

This paper intends to analyze lexical components and semantic structure of a Japanese verb “damasu (deceive)” and synonyms for the word “damasu(deceive),” and to categorize these synonyms by applying the topological theory. First, based on Cognitive Linguistic theory, the paper extracts “prototype” that forms the core part of the semantic structure of the word “damasu (deceive)”by analyzing lexical components forming the word. Secondly, the paper spells out major synonyms for “damasu (deceive)”. Synonyms are different phonological words that have the same or very similar meanings that “damasu (deceive)” presents.

Upon examining similarities and differences in meanings that these synonyms present, the paper categorizes these synonyms based on the particular usage pattern by applying the Topological Theory.

Key words: Prototype, Semantic Structure, Lexical Components, Synonyms, Topological Theory

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

「騙す」を巡る類義語群に対する位相論的考察及び意味分析

謝豊地 正枝*

要　旨

本稿の目的は、第一に、認知意味論に基づいて抽出された「騙す」の概念を支える「プロトタイプ（中心的な意味特徴の組み合わせ)」によって、中心的な意味領域の範囲を設定した上で、「騙す」と意味的に類義関係にある主な 26 の動詞によって形成される「類義語群」を抽出する。更に、それらの類義語群と意味的に係わる複合動詞・関連語・慣用句･俗語などを含んだ 37 の「関連語句群」を抽出する。第三に、26 の類義語群の中から、「欺く」「たぶらかす」「ごまかす」「まどわす」「計る」「陥れる」「たらす」を「騙す」の主な類義語として選択して、「騙す」の表す概念を支える「プロトタイプ」とこれらの七つの動詞によるそれぞれの概念を支える「プロトタイプ」とを比較分析する。結果、明らかになったことに基づいて、「騙す」の示す意味領域と主なそれぞれの類義語群が示す意味領域とが「重なり合う部分」と「重なり合わない部分」とを解析して明らかにすることにある。

第四に、前述の「騙す」を巡る個々の類義語群及び関連語句群を、位相論的な見地から異なる意味系統に拠って分類するのみならず、それらの語の示す品格の高低について考察して分類化して、更にそれらの語を、文章語、口語、日常会話語、男性・女性・中性による用途別の観点から見た性向語、及び、俗語などのカテゴリー別に分類した上で、位相論に基づいてそれぞれの語の表示する品格の高低に関して考察する。そして、それぞれの個々の類義語及び関連語・

* 台湾大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

関連語句がどのような品格の高低を示すか、また、それぞれの語がどのように意味的に相互関係にあるかを図示して指摘することにある。

キーワード： プロトタイプ、意味構造、意味特徴、類義語、位相論

臺灣大學學術期刊資料庫

「騙す」を巡る類義語群に対する位相論的考察及び意味分析

謝豊地 正枝

一、本稿の目的と研究手順

本稿のテーマは、日本語の動詞「騙す」及び「騙す」を巡る類義語群の表す諸概念が、認知意味論に基づいて抽出された「騙す」の表示する「プロトタイプ」が表示する意味領域と、どのように重なり合っているかに関して意味論的に解析して明らかにすること、そして、「騙す」を巡る類義語群を形成するそれぞれの個々の類義語と意味的に係わっている複合動詞・動詞句・慣用句などの関連語句群を形成する主な関連語・関連語句を抽出し、認知意味論及び位相論に基づいてカテゴリー別に分類して意味的な相互関係を指摘することである。

研究手順としては、第一に、類義語とは何かを定義した上で、「類義関係にある語と語」の諸例を挙げてから、それぞれの諸例を四種類の類義関係のあり方に基づいてそれぞれのカテゴリー別に分類する。その場合、それぞれの「類義関係にある語と語」とが、どのように意味的に重なり合っているかについて明らかに示す。

次に、動詞「騙す」の意味構造、及び、「騙す」の概念が示す意味領域を明らかに示してから、「騙す」を巡る類義的なまとまりを形成する類義語群を抽出する。更に、類義語群と意味的に係わりのある複合動詞・動詞句・慣用句などの関連語・関連語句群も抽出する。そして、「騙す」の概念が示す意味領域を基本として、「騙す」を巡る類義語群を形成している個々の類義語による概念の表示するそれぞれの意味領域が、「騙す」の示す意味領域とどのように意味的に重なり合うかについて認知意味論に基づいて分析・考察する。もし、差異が見出されるならば、その差異について図示して指摘する。

臺灣大學學術期刊資料庫

第三に、「騙す」を巡る類義語群、及び、それらの類義語群と意味的に係りのある関連語・関連語句群を含めた、トータルな意味での類義語群・関連語句群を、位相論に基づいて品格の高低について考察した上でカテゴリー別に分類して図示する。更に、認知意味論に依拠して、個々の語の間に存在する複雑に織り成されている幾種類もの意味的な流れ、及び、意味的な相互関係を解析して明らかにする。尚、本稿における文例は筆者の作例によるものである。

二、類義語の定義及び類義関係の種類に関する考察

下記の二文中における「歩む」と「歩く」は意味が似ている。

（1）柳の木が植えられている川べりを歩む。

（2）菜の花が満開で揺れている畑の中の道を歩く。

における（1）文中の「歩む」には、「辺りの風景を楽しみながらゆっくり散歩するように歩んで行く点、及び、語感に優雅さがある点、の二点が感じられるが、（2）文中の「歩く」には毎日の「歩く」動作を表現していて、「歩む」の表すニュアンスは感じられない。けれども、「歩む」「歩く」の二語は「歩んで行く」という移動を表示する動詞であることには変わりはない。「歩む」「歩く」のように、意味的に似ている二つ以上の「語」の間に存在する意味的な関係を「類義関係」といい、類義関係によって結びつく二つ以上の「語」を「類義語」という。

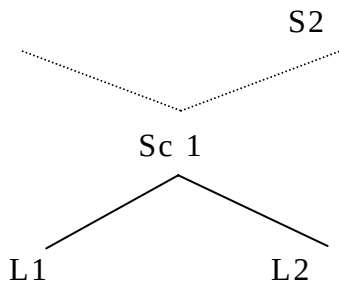
次に、語と語の類義関係について考察すると、第一に、一つの語の意味と他の一つの語とが全く重なり合うものを「同義語」という。けれども、実際には、全く意味が重なり合うとみなされる完全な「同義語」は、「目医者」と「眼科医」のような場合であり、しかも、それは稀な例であるとされている。[1] 語の表す概念を支えているのは意味構造であるが、その意味構造を形成する意味特徴は、意味素性の組み合わせによって構成されている。類義関係にある二つの語

[1] 池上嘉彦『意味論――意味構造の分析と記述』1993年、大修館書店、p. 258。

臺灣大學學術期刊資料庫

が完全に意味が重なり合う場合について、前述のような意味構造の根底のレベルにまでメスを入れて解析して考察すれば、例えば、ある「一つの語」の概念が二つの意味特徴の組み合わせによって形成されている場合、それぞれの意味特徴を「L1」、「L2」で表すとして、また、それぞれの意味特徴を形成する意味素性を「S1」、「S2」で表すとすれば、意味特徴「L1」「L2」と意味素性「S1」「S2」とが、複合的な意味特徴である「Sc 1」において全く一致する場合のことを指す。それを下記に図示する。[2]

【図　1】完全な同義性を形成する意味特徴と意味素性との関連図

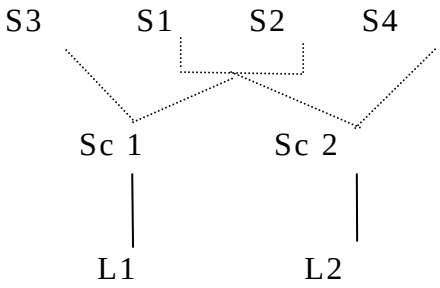


これに対して、部分的な同義性とは、例えば、「父」を「L 1」、「母」を「L 2」として表せば、それは、〈父〉（Sc 1）と〈母〉（Sc 2）という複合的な意味素性の組み合わせによって形成されていることを表している。そして、〈直系〉＝〈S1〉、〈一世代上〉＝〈S2〉、〈男性〉＝S3、〈女性〉＝S4、とすれば、「父」は、〈父〉（Sc 1）＝S1＋S2＋S3、で表すことができる。また、「母」は、〈母〉（Sc 2）＝S1＋S2＋S4 で表すことができよう。共通して共有している意味素性は、【〈直系〉＝S1】と【〈一世代上〉＝S2】であることを見出すことができる。この部分的同義性を下記に図示する。

[2]　【図１】【図２】共、池上嘉彦 『前掲書』（p.259）による。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図 2】部分的な同義性を形成する意味特徴と意味素性との関連図



関連して、例えば、「あした／あす／明日（みょうにち)」の三語の間には、表面的には意味が重なっており、完全な同義性が存在するかのように見えるが、ニュアンスや語感を含む主観的・情緒的な意味の側面においては、差異が存在する。したがって、厳密には、これら三語の間には完全な同義性は認められない。しかし、これら三語が意味的に類義関係で結びついている類義語であるのは確かである。そして、これら三語が表示する意味領域は、互いに完全に一致してはいないにしても、ほぼ重なり合うことが認められる。このような意味的な領域がほぼ重なり合う類義関係で結ばれているものを、【カテゴリーⅠ】とすれば、例えば、動詞では、前述の「歩む／歩く」「決める／定める」「食べる／くう」「行く／ゆく」「言う／ゆう」「走る／駆ける」など、また、第一人称代名詞である「わたくし／わたし／僕／俺／我」、副詞である「必ず／きっと」「速やかに／直ぐに／直ちに」、若しくは、名詞である「本／書物／書籍」「手紙／書簡／レター」などの組み合わせがこのカテゴリーに属する。

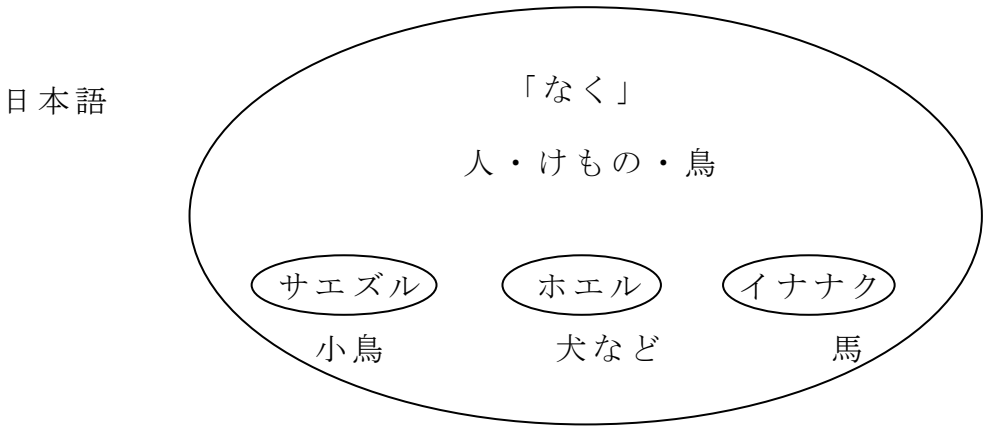
【カテゴリーII】は、類義関係にある語を表す概念が示す意味領域の一部が重なり合うものである。「訪れる／尋ねる／聞く」「さき／はし／ふち／へり」「うれしい／たのしい」「うるさい／やかましい／さわがしい」「きれいだ／美しい」[たび／旅行／ツアー]などがこのカテゴリーに属する。

関連して、意味的な類義関係の一つとして、二つかそれ以上の語が、意味的に互いに包摂・包含関係によって結びつくものを【カテ

臺灣大學學術期刊資料庫

ゴリー III】として分類する。二語の間に見出される意味的な関係は、例えば、「宿」（上位語）と「ホテル／旅館／民宿」（下位語）の関係、「まずい」（上位語）と「下手だ」（下位語）の関係、「とまる」（上位語）と「宿泊する／停止する」（下位語）の関係、「なく」（上位語）と「ほえる／いななく／さえずる」の関係、などがある。「上位語」と「下位語」の関係とは、例えば、「なく」は、「なく」と類義関係にある「ほえる／いななく／さえずる」というそれぞれの「語」を意味的に包んでいる。それ故、「なく」は「ほえる／いななく／さえずる」の「上位語」であることが分かる。そして、この「なく」という上位語に対して、「ほえる／いななく／さえずる」という、「なく」に包み込まれる語群を「下位語」と言う。このように、上位語である「なく」と、下位語である「ほえる／いななく／さえずる」とは意味的に包摂・包含関係に基づいて形成されている類義関係なのである。「なく」と下位語である「ほえる／いななく／さえずる」の組み合わせをそれぞれ日本語及び中国語で表したものを、【図３】として図示する。[3]

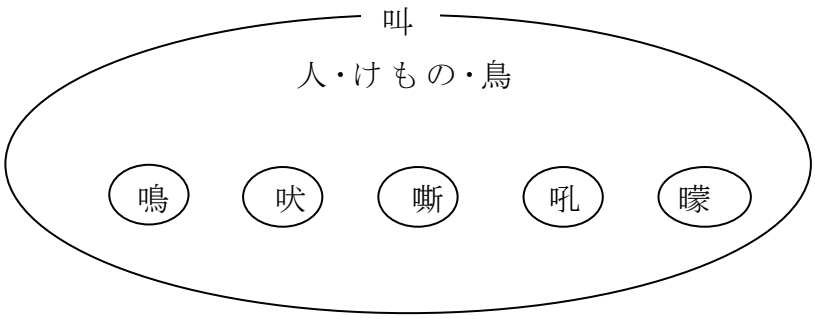
【図　３】**動詞「なく」の構造図**



[3]　田中章夫『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版、2002年、p.8。

臺灣大學學術期刊資料庫

中国語[4]



次に、名詞では、例えば、「池／沼／湖」「ごみ／かす／塵／ほこり」「霧／靄」「文／文章」などがあり、また、形容詞では、「貧しい／乏しい」「冷たい／寒い」などがある。ちなみに、「霧／靄」の二語は互いの意味が非常に近いが、これらの二語の使い分けに関しては、見通しがきかない状態の時には「霧」と判断するが、見通しのきく状態の時は「靄」と判断する。また、動詞では、「分ける／わる」「のぼる／あがる」が例としてあげられる。これらの例のように、意味上では区別されるが、互いの意味が近い関係にあるものを【カテゴリーIV】として分類できよう。

以上、類義語の一種である同義語の定義、及び、類義語を形成する意味的な関係という視点から考察して類義語を分類すると、主に四種類あること、そして、それぞれのカテゴリーを形成する意味的な関係の特質について明らかにした。類義語のあるものはこれらの四種類のカテゴリーにはっきりと分類できるが、大半の類義語及び類義語群は、これらの四種類内の幾種類かと係わり合って構成されている。そして、その意味的な重なり合いが複雑になればなるほど、類義語の関係にある二語の表す概念によって示される意味的な領域は、複雑に絡み合っていることが分かる。

[4] この図は朱一星によるものである。田中章夫『前掲書』東京堂出版、2002年、p.8。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、動詞「騙す」を巡る主な類義語群に対する位相論的考察及び意味分析

（一）「騙す」及び「騙す」を巡る主な類義語群に対する意味論的比較分析と考察

1.「騙す」の表示する概念を形成するプロトタイプの抽出

まず、動詞「騙す」の表示する概念について考察する。下記を見られたい。

（3）子守唄を歌って、泣く子を騙す。

（4）疲れた身体を騙し、騙し、しながら、その仕事を終えた。

（5）友達を騙して、必要なお金を借りた。

（6）彼は家庭教師をしていた金持ちの家族を騙して、財産を詐取した。

（7）彼は友人の由美や私を騙して、結局、私達の知らない間に玲子と結婚した。

（8）その女を騙して、一夜を一緒に過ごした。

において、（3）文中の「騙す」という動作の相手は「子供」であり、「騙す」の示す概念は「すかしなだめる」の意味を表示している。（4）文中の「騙す」動作の相手は「自分」であり、「騙す」の示す概念は「労りなだめる」の意味を示す。これらの場合の「騙す」の意味は共に肯定的である。これに対して、（5）文中の「騙す」行為の相手は、男女を問わず成人である「大人」であり、「動作主は金銭を借りる目的を達成するために、予め相手を欺くことを意図して、動作の対象となる相手に虚偽を真実らしく装って信じ込ませて、相手の動作主に対する信頼を利用して金銭を得る行為」を意味している。また、（6）文中の「騙す」動作の相手は「財産を詐取しようと予め狙いを定めたターゲット」であり、この場合の「騙す」の概念は、「動作主が予め財産を詐取しようという意図の下に、動作の相手である金持ちの家族を罠に陥れて、財産を詐取する行為」という意味を示す。（7）文中の「騙す」行為の相手は「女性」であるが、この場合の「騙す」の概念は、「精神的にまどわす」の意味である。そして、

臺灣大學學術期刊資料庫

この場合の「騙す」行為の相手は「女性」のみであるとは限らない。「男性」の場合もあるのである。これに対して、(8) 文中の「騙す」行為の相手は「女性」に制限されており、この場合の「騙す」の示す概念は、「動作主である男が性的な快楽を得ることを目的として女性を欺いて肉体関係を結ぶ行為」を表示する。したがって、これら (5) 文から (8) 文中の「騙す」の表示する概念は、全て否定的であることが分る。以上、指摘したように、「騙す」の表す概念を支える意味領域は、肯定的・否定的な意味の両方を含んでおり、その意味領域は広いことが推察される。また、「騙す」という「語」が実際の言語活動に用いられる場合を想定して肯定的な意味と否定的な意味との割合について考えれば、否定的な意味の方が肯定的な意味よりも多く用いられていると考えられる。

以上、明らかにされた事柄に基づいて、「騙す」の示す概念を支えるプロトタイプ(意味構造の中心を成す意味特徴)を抽出すれば、〈動作主が自己に有利な精神的な状況や肉体的・物質的・金銭的な利益を得る目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈甘言によって相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為をすることや〉〈相手をすかしたり、労ったり、慰めたりする行為をすること〉であると考えられる。そのため、「騙す」の示す概念には、動作主が何らかの形で自己の利益を得ようという目的と動機、及び、その目的を達成しようという動作主の主観的行為、の二点に平均的に重点が置かれていることが見出せる。

2.「騙す」を巡る類義語群及び関連語・関連語句群の抽出

前項における「騙す」の表す概念を支える意味構造を形成する中心的な意味特徴の組み合わせである「プロトタイプ」に基づいて、「騙す」と意味的に類義関係にある、意味的なまとまりを形成する類義語群について考えれば、それらの主なものとしては、「騙かす」「騙くらかす」「欺(あざむ)く」「たぶらかす」「ごまかす」「めくらま

臺灣大學學術期刊資料庫

す」「偽（いつわ）る」「かつぐ」「かたる」「なだめる」「労りなだめる」「賺（すか）す」「賺しなだめる」「幻惑する」「まよわす」「まどわす」「まどわかす」「たらす」「おとす」「陥（おとしい）る」「陥（おとしい）れる」「計（はか）る」「計略する」「謀略する」「詐取する」「詐称する」などを挙げることができよう。

次に、これらの類義語群の表示する概念と意味的に係りのある動詞・複合動詞・動詞句・慣用句などを含む関連語・関連語句について考えれば、動詞では、「なりすます」「見せかける」「惑乱する」など、複合動詞では、「騙しとおす」「騙し果（おお）す」「引っ掛ける」「垂らし込む」「（嘘を真実であると）信じ込ませる」「（虚偽を真実であるかのように）取り繕う」「謀略を計りめぐらす」「人目をまぎらわす」などがある。また、動詞句では、「嘘を言う」「嘘をつく」「でまかせを言う」「でたらめを言う」「（虚偽を真実であるかのような）ふりをする」「（虚偽を真実であるかのように）装う・繕う」「思い違いをさせるように仕向ける」「計略にかける」「罠にかける」「罠にはめる」「詐欺をする」「すかたんを食わせる」「甘言でつる」「いんちきする」などがある。そして、慣用句としては、「口車に乗せる」「仲人口に乗せる」「鯖をよむ」「煙に巻く」「鎌をかける」「騙し討ちにする」「見かけ倒れ」「虎の威を借る狐」などがある。俗語としては、「ちょろまかす」「いかさまする」「美人局（つつもたせ）をする」「スケこます」などを挙げることができよう。

（二）「騙す」を巡る類義語群の内の主な類義語の表すそれぞれの概念を形成する意味特徴に対する分析

この項では、「騙す」の主な類義語として「欺く」「たぶらかす」「ごまかす」「まどわす」「計る」「おとしいれる」「たらす」の七語を例にあげて、それぞれの語が表示する概念を支える意味特徴について考察する。そして、それぞれの語が表す概念を支えるそれぞれの意味特徴の組み合わせと、「騙す」のプロトタイプとを比較分析して、「騙す」の表示する意味領域と、「騙す」と意味的に類義関係にあるこれらの個々の七語が表示するそれぞれの意味領域との間に、

臺灣博碩學術期刊資料庫

どのような意味的な重なり合いがあるか、或いは、どのような意味的なずれが存在するか、について解析して明らかにする。

1.「欺く」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「欺く」を用いた文例を下記に示す。

（9） 大学を卒業しておきながら、無学の振りをするとは、自己を斯く行為だ。

における「欺く」は、話し手自身の精神的な領域と係わる概念を示しており、動作の相手として被害を蒙るのは話し手自身のみであるから、他人に被害を及ぼすという意味を表さない。そのため、この用法は、中立的な意味合いを表す。また、「欺く」は否定的な意味で用いられることもある。下記を見られたい。

（10） あなたは二人でハワイ旅行に行こうと言いながら私を欺いて、一人行ってしまったのね。

（11） 彼は私と結婚すると欺いて、私の貯金を持って逃げた。

（12） 今朝、庭には霜が白菊と欺くかのように白く降りていた。

（13） 今朝、庭には霜が白菊と騙すかのように白く降りていた。

における（10）（11）文中の「欺く」は「騙す」とも交替可能である場合である。そして、（10）文中の「欺く」は、「あなたの一人でハワイへ行くという動作」によって、相手（この場合は「【私】と称する話し手」）が「失望感」という精神的な被害を蒙った場合である。これに対して、（11）文中の「欺く」の場合は、【動作主である「彼」は、予め、話し手の「貯金を詐取する」目的があり、その目的を達成する意図の下に「話し手である【私】と結婚するかのように装って話し手」を欺した】のであるから、動作の対象である話し手が、精神的にも金銭的にも被害を蒙った場合である。そして、（10）（11）文中における「欺く」の表す概念を支える意味領域と、「騙す」による概念を支える意味領域について考えると、二つの語が表示する意味領域は、「被害を蒙った程度の差」こそあれ、ほぼ完全に重なり合うことが分る。また、（11）文中の「欺く」は「あなたは金銭を詐取する目的の下に「私と結婚しよう」と言って私を騙した」の意味を

臺灣大學學術期刊資料庫

表示するが、(12) 文中の「欺く」は「・・・と見間違う」の意味を表現しており、「まどわす」とは交替が可能でも、「騙す」と交替させると、不自然である。

以上に基づいて、「欺く」の示す概念は、〈動作主が自己に有利な精神的な状況や肉体的・物質的・金銭的な利益を得る目的を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈甘言によって相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為をしたり〉〈相手に「・・・とまがう」「・・・と見間違う」などの思い違いをさせるように仕向けたりする行為〉などの意味特徴の組み合わせによって支えられているものと考えられる。したがって、「騙す」のプロトタイプと「欺く」の表示する概念を支える意味特徴とは、ほぼ同じ意味特徴が存在していることが分る。これら「騙す」「欺く」の示す概念を支える意味領域の広さが重なり合うケースの概念が表現されている場合には、「欺く」は「騙す」と交替が可能であることが判断できよう。

また、「騙す」と「欺く」の表す概念の間に存在する差異について考察すれば、「欺く」の方がより中和された概念（肯定的でも否定的でもない中立的な概念）を示すので、「騙す」の概念が重視する「動作主が精神的・肉体的・物質的・金銭的な何らかの利益を得る目的・動機を達成するために予め意図して行動する」という動作主の主観性の強さと比較すれば、「欺く」の方が「騙す」よりも弱い点、〈・・・と見間違う〉という意味を表現できる点、及び、「騙す」の概念を支える意味特徴の内、「相手をすかしたり、労ったり、慰めたりする」概念を表さない、等の三点であろう。

2.「たぶらかす」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「たぶらかす」を用いた文例として、下記を見られたい。

(14)　病気の子供に苦い薬を甘いとたぶらかして、上手に薬を飲ませた。

(15)　病気の子供に苦い薬を甘いと、欺いて上手に薬を飲ませ

臺灣大學學術期刊資料庫

た。

（16） 人の心をたぶらかすのはよくない。

（17） 子供が道を尋ねた時にたぶらかして、わざと迷子にさせる。

（18） 子供が道を尋ねた時に騙して、わざと迷子にさせる。

（19） 彼は老人をたぶらかして、貯金を巻き上げたので、詐欺罪で逮捕された。

において、（15）文中の「たぶらかす」の示す概念は、「話し手が、話し手の動作の相手によかれと思って、わざと「苦い薬を甘い」という偽りを言って相手に信じ込ませて、相手に話し手が予め意図していた「苦い薬を呑ませること」を意味する。その意味では、この場合は動作主の動機が肯定的である用法であり、結果的に、「たぶらかす」も肯定的な意味合を表す場合である。そして、（15）文が示すように、「騙す／欺く／たぶらかす」の三語の内では、「たぶらかす」が最も自然な表現であり、したがって、この場合の「たぶらかす」は「騙す」「欺く」とは交替しないのが一般的な用法である。

これに対して、（16）文中の「たぶらかす」の表示する概念は、「甘言を用いて人を幻惑させる・迷わす・惑わす」の意味であって、否定的な意味を表す。また、（17）文中における「たぶらかす」の表す概念は、「面白半分に動作主より力の弱い相手をからかうために、相手をわざと迷わす・わざと間違えさせる」の意味合いを表す。（16）文中の「たぶらかす」の表す概念には、話し手が「たぶらかす」動作をしても、話し手側にはなんの物質的・金銭的な利益ももたらさない。そのため、（18）文例のように、「騙す」と交替して用いれば不自然な表現となる。

また、（19）文中における「たぶらかす」の表す概念は、〈動作主が自己に有利な金銭的な利益を得る目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為に加えて〉

臺灣大學學術期刊資料庫

〈「・・・とまがう」「・・・と見間違う」などの概念を表示すること〉などの意味特徴によって形成されていると考えられる。そのため、(19) 文例中の「たぶらかす」の概念を支える意味特徴は、「騙す」「欺く」の表す概念を支える意味特徴と共通していて、それぞれの語によって示される意味領域も重なり合うので、相互に交替が可能であるということが見出されるのである。

3.「ごまかす」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

動詞「ごまかす」は名詞の「胡麻菓子」が動詞化したものである。江戸時代に「胡麻胴乱」という小麦粉と胡麻をまぜて、焼いてふくらました菓子の別名が「胡麻菓子」であった。[5] この「胡麻胴乱」は中が空洞になっていたので、「胡麻菓子」は「みせかけや外見だけよくて内容が伴わないもの」とか、「だまして人目をまぎらすこと」などの意味を表現することになったのである。「ごまかす」を用いた文例を下記に示す。

(20)　林さんは 70 歳になるが、厚化粧をして年をごまかしている。

(21) ？林さんは 70 歳になるが、厚化粧をして年をだましている。

(22)　社長命令によって、会計士は今期の決算報告書の収益を少なく見せかけるためにごまかした。

において、(20) 文中の「ごまかす」の表示する概念は、〈本当の年より年下に見られたいという意図の下に〉〈厚化粧で実際の老人膚の状態を糊塗して人目をまどわす〉ことである。「ごまかす」には、その動作によって相手に与える危害の程度や動作によって生じる結果は「相手の判断次第」であり、動作主は予め意図していた目的を達せられても達せられなくても、結果に責任を負わないという、客観性が見出される。この場合の「ごまかす」は「嘘をつく」「人目を欺く」「人目をまどわす」などと交替が可能であると考えられる。しか

[5]　新村出編『広辞苑』岩波書店、1980 年、p.831。

臺灣大學學術期刊資料庫

し、(20) 文中の「ごまかす」を「騙す」と交替させた (21) 文例では、文全体の意味が不自然になる。この視点から、「相手を騙すもくろみの大きさ」と「騙しの強弱」の程度に関して考えれば、「ごまかす」の方が「騙す」よりも動作主のもくろみがより小さくて、「騙し」の程度も弱いと考えられよう。

また、(22) 文中の「ごまかす」の表す概念は、「税金逃れを目的として、収益の事実を改竄して事実よりも少なく見せかける」ことを意味する。「数字・数量を改竄したり、見かけを糊塗したりする」という概念を表す際には、「騙す」や「騙す」を巡る他の類義語群よりも、「ごまかす」が用いられる場合が多いようである。(22) 文中における「ごまかす」も「騙す」と交替すると不自然であるが、「人目を欺く」「人目をまどわす」などとは交替が可能である。しかし、そうであっても、ニュアンス的には、「ごまかす」とは微妙に異なることを指摘しておきたい。それは、「人を騙すために (数量を) ごまかす」「人目を欺くために (金品を) ごまかす」「人目をまどわすために (見かけ) をごまかす」というように、「人目を欺く」「人目をまどわす」などは、「ごまかす」という動作の目的を表現する機能を示すことができるからである。

以上の分析・考察に基づくと、「ごまかす」の表す概念は、〈動作主が自己に有利な精神的な状況や肉体的・物質的・金銭的な利益を得る目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して事実を糊塗したり改竄したりしていながら〉〈表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為や〉〈相手に「・・・とまがう」「・・・と見間違う」などの思い違いをさせるように仕向ける行為〉などの意味特徴によって支えられている概念であると考えられる。

4.「まどわす」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「まどわす」は、一般的には、下記の文例によって示されるように、大きく二種類の概念を表現する時に用いられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

（23）　彼は私を愛しているふりをして、彼に関心のない私を惑わした。

（24）　高速道路の道しるべがはっきりしなかったので、惑わされて出口がどこかわからなくなった。

における（23）文中の「まどわす」の概念は、「思慮を乱させる」「分別を失わせる」などの意味を表すが、（24）文中の「まどわす」はこれら二つの意味に加えて「まごつかせる」の意味を最も強く表す。

「まどわす」の示す概念を支えるプロトタイプについて考えれば、〈動作主が自己に有利になるように「動作の対象となる相手の心をかき乱す」という目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈甘言によって相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した「相手の心をかき乱す」という目的・動機を果たす行為をすることや〉〈物事がはっきりせずにまごつかされること〉であると考えられる。「騙す」を巡る類義語群の内、「まどわす」の示す概念に最も近い他の類義語としては、「幻惑する」「迷わす」「まどわかす」の三語を挙げることができよう。

5.「計る」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「計る」は、「騙す」を巡る類義語群の内でも、最も多い多義性を表す。「計る」の表す多義的な概念としては、概ね、「数量を計る／数える／計算する」「長さを計る」「物事を推し量る／考える／分別する」「物事を予測する」「相談する」「企てる／もくろむ／工夫する」「機会をうかがう／見計らう」「騙す／欺く」などが挙げられよう。「計る」が示すこれらの多義的な概念の内、「騙す」と意味的に係わっている概念は、最後に挙げられている「騙す／欺く」である。また、関連語としては、「詐欺行為をもくろむ（企てる）」、「計略をもくろむ・たてる」「謀略をはりめぐらす」などが挙げられよう。「計る」を用いた会話例を下記に示す。

（25）　A「友達のお前が銀行から借金するための保証人になって助けたのに、何故、私の家が競売にかけられなけ

臺灣大學學術期刊資料庫

ればならないのか？」

B「最初から借金を返すあてがなかったからさ。」

A「お前、俺に何も言わないで。計ったな！」

における「計る」に制限した場合の意味特徴としては、〈動作主が自己に有利な精神的な状況や肉体的・物質的・金銭的な利益を得る目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈甘言によって相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為をすること〉などの組み合わせが考えられる。これらの意味特徴の全ては、「騙す」の概念を支える意味特徴の大きな部分を占めるものとして含まれているから、「騙す」と（25）の会話例の中で用いられている「計る」の示す概念が示す意味領域とは重なり合うと推測される。そのため、（25）の会話例における「計る」は「騙す」と交替可能であろう。但し、前述したように、「計る」の示す全ての多義性を支える意味領域と、「騙す」の概念を支える意味領域とを比較すれば、「計る」を支える意味領域が広いので、「騙す」の意味領域とは重ならない部分が相当広いことは否めない。そして、「騙す」を巡る類義語群の内、「計る」の示す概念に最も近い他の類義語としては、「計略する」「謀略する」の二語であろうと考えられる。

6.「陥れる」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「陥れる」による概念には、動作の相手を「苦衷に落ち込ませる」「苦衷に落す」「心身に苦しみ・悲しみ・痛みを感じさせるような立場に陥らせる」「騙して苦しい立場に落す」などの意味が表現できる。その中でも、「騙す」の示す概念に係わりのある意味は、「ターゲットに選んだ相手を直接的・間接的に騙したり攻撃したりして陥れるために、ターゲット或いはターゲット以外の第三者を騙して、ターゲットを苦しい立場に落す」という、「目的」よりは「手段」を重視する概念である。「陥れる」を用いた文例を下記に示す。

（26） 自分が選挙に当選するために、対立候補に対して誹謗する

臺灣大學學術期刊資料庫

虚偽の事柄を公言して（選挙民を騙して対立候補を）陥れた。

における「陥れる」に制限した場合、「陥れる」の示す概念を支える意味特徴としては、〈動作主が自己に有利な選挙状況を確保する目的・動機を達成するために〉〈対立候補のイメージダウンを計ることを予め意図して〉〈表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈選挙民に虚偽を真実だと信じ込ませて騙して〉〈動作主が予め意図した対立候補のイメージダウンを計って〉〈対立候補を窮地に落す行為をすること〉である。また、相手を直接的に陥れる場合もある。

（27）商売敵と思う人にわざと借金をさせて、破産に追い込んで：陥れた。

における「陥れる」の示す概念に制限した場合の意味特徴としては、〈商売敵と思う相手を社会的に破滅させようという目的・動機を達成するために〉〈予め意図して甘言によって相手に借金させるという手段を取るように計って〉〈相手を破産に陥れて破滅させる行為〉である。

この事実に基づいて判断すれば、「陥れる」は「騙す」とは、意味領域が完全には重ならないことが見出せる。また、重なる部分の意味領域は狭い。「陥れる」の示す概念は、「騙す」の示す概念よりも、むしろ、「計る」の示す意味と重なる部分が大きい。そして、「陥れる」の示す意味領域は、「騙す」の示す意味領域とは、単に、「目的を達成するための手段のレベル」において意味的に重なるのであるから、「騙す」と「陥れる」の二語の間に存在する「意味的なずれ」は小さくはないことが推察できよう。

7.「たらす」の表す概念を支える意味特徴に対する考察

「たらす」の示す概念には、「子供などをすかしなだめる」「人を甘言で騙す」「人を誘いこむ」「誘惑する」などがある。したがって、「たらす」という動作の対象となる相手としては、成人の男女のみならず、子供や老人も含む。但し、前述の概念の内、「たらす」の概

臺灣大學學術期刊資料庫

念が「誘い込む」「誘惑する」という意味を表す場合の動作の相手は、「女性」である。特に、「たらし込む」という複合動詞の場合は、動作の相手は「女性に限られる」のが一般的な用法である。

（27）あなたにたらし込まれたのは悔しいが、私には新しい人生を一人で踏み出す勇気がある。

「たらす」の示す概念を支える意味特徴としては、〈動作主が自己に有利な精神的な状況や肉体的・物質的・金銭的な利益を得る目的・動機を達成しようと予め意図して〉〈動作の対象となる相手に対して表面的には真実に満ちているかのように装った虚偽の言動をして〉〈甘言によって相手に虚偽を真実だと信じ込ませて〉〈動作主が予め意図した目的を果たす行為をしたり〉〈相手をすかしたり、なだめたり〉〈甘言で女性を誘惑したりすること〉である。

「たらす」の示す概念には、動作の相手が女性であり、しかも、動作主が肉体的な快楽を得ることを目的に女性をたらすことが含まれている。この点において、「騙す」の示す概念に含まれる「動作主が肉体的な快楽を得ることを目的・動機として女を騙す」という部分と意味的に重なり合うことが見出せるであろう。

8.「騙す」を巡る個々の類義語の間に存在する意味的な相互関係に関する比較分析と考察のまとめ

この項では、前項において判明した諸点に基づいて、「騙す」を巡る類義語群及び関連語群との意味的な相互関係について分析して、【第三章．第二項】のまとめとしたい。

まず、「騙す」の概念は、「動作主が精神的・肉体的・物質的・金銭的などの何らかの面で自己の利益を得ることを目的とした動機と、それを予め意図すること」に重点を置いている。「騙す」の概念を支える意味構造を形成している中心的な意味特徴としての「プロトタイプ」と「欺く」の示す概念を支える意味特徴とはほぼ重なり合っている。しかし、「動作主が何らかの面で自己の利益を得ることを目的とした動機とそれを予め意図すること」という面において、「欺く」の示す概念は「騙す」ほど強くない。また、「欺く」が示す

臺灣大學學術期刊資料庫

「・・とみまごう」という意味特徴は、「騙す」の意味特徴には含まれていない。「欺く」の示す目的・動機は「相手によかれ」という肯定的な動機を表現出来る場合があるが、「騙す」にはない。また、「騙す」の概念を支える意味特徴の中には「すかしたり、労ったり、なだめたりする行為」が含まれるが、「欺く」の意味構造にはこれらの意味は含まれない。したがって、これらの点において、「騙す」「欺く」の二語の間には、「意味的なずれ」が見出せる。

第二に、「騙す」と「たぶらかす」の間に見出せる意味的な類義関係の重なり合いについて分析すれば、「騙す」の示す概念は、「動作主の精神的･肉体的物質的・金銭的な利益を得るという目的・動機のために予め意図して」という目的・動機に重点が置かれているものと思われる。その概念と比較すれば、「たぶらかす」の概念は「甘言を用いて動作の相手を幻惑させる・迷わす・惑わす」という行為の方に重点が置かれている。また、「騙す」の示す広い意味領域に比べれば、「たぶらかす」の意味領域は狭いものと考えられる。

次に、「騙す」と「ごまかす」の二語の意味的な重なり合いについて解析すれば、「騙す」という概念は動作主が動作の相手に、主観的に、また、積極的に、働きかけをすることを表現しているが、「ごまかす」の概念は、「騙す」の概念に比較すればより客観的である。「ごまかす」という動作による相手への危害や動作による結果は、「相手の判断次第」であり、「騙す」の示すような「ある目的を達成するために、ある一定の対象に絞った主観的な行為」よりも話し手及び動作主による主観性が低くて目的の達成に対する熱心度も緩いと考えられる。

第四に、「騙す」と「まどわす」の二語の意味的な重なり合いについて分析すれば、「騙す」よりも「まどわす」の方が、動作主が物質的・金銭的な面での自己の利益を得ようとする目的や動機に比べると、「人の心をまどわす」という表現に見られるように、精神的なレベルに止まっている場合が多いようである。「まどわす」に意味的に近い「幻惑する」「迷わす」「まどわかす」なども、動作の相手の心

臺灣大學學術期刊資料庫

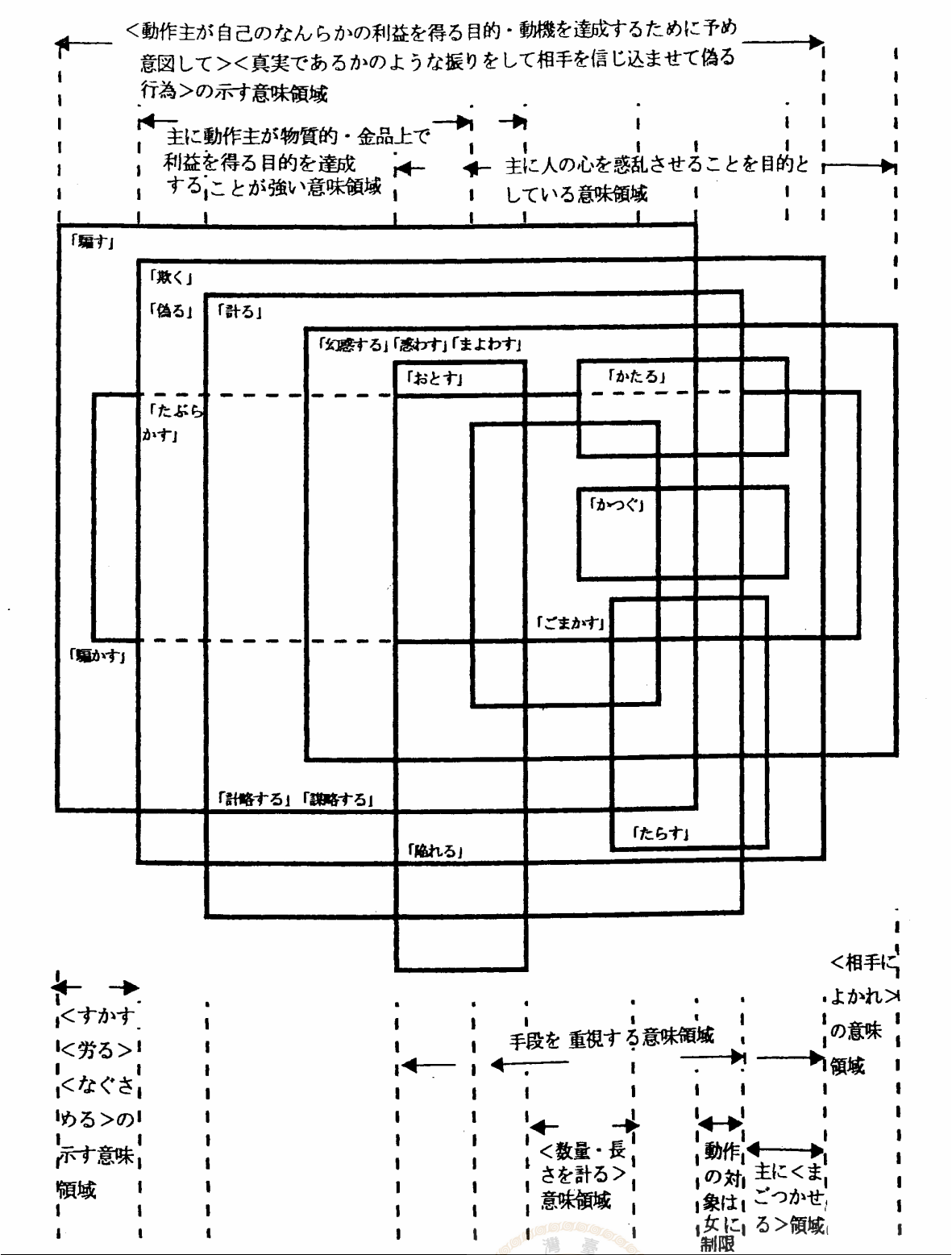
理的・精神的なレベルでの事柄を表現する時に用いられる場合が多い。「まどわす」は、「甘言によって【動作の相手が勘違いする／思い違いをする】ように仕向ける行為」に、より重点が置かれている振る舞いが監察されるので、動作主は「【勘違いする／思い違いをする】相手が悪い」と自己弁護できよう。また、動作主が必ず物質的・金銭的な面で利益を得るとは限らない場合、すなわち、「人の心を迷わせただけ、あるいは、人をまごつかせただけ」であっても、「まどわす」を用いて表現できる。この点から判断すると、「騙す」の概念が示す意味領域と、「まどわす」の示す概念の意味領域とは、ある一部分において重なり合ってはいるが、その重なり合い方の度合いはあまり強いとは言えない。

第五に、「騙す」と「計る」の二語の意味的な重なり合い方について分析すれば、「計る」の方が多義的な意味が多い。その多くの多義的な意味の中でも、「騙す／欺く」と共通した意味特徴によって多義的な意味が支えられている場合に限って、これらの二語は意味的に重なり合う。「計る」が示すその他の多義的な意味の内では、「企てる／もくろむ」も「騙す」の表す意味と僅かに重なり合う。「企てる／もくろむ」の場合は、「動作主が精神的･肉体的・物質的・金銭的に自己の利益を得るという目的・動機があって相手に何か危害が及ぶ行為をする」場合に限って、「騙す」の示す意味と重なり合うことが明らかになった。

第六に、「騙す」と「陥れる」の二語の意味的な重なり合い方について考えれば、「陥れる」は、動作主にとって有利な状況を確保するために、動作の相手を「悪い状況に落して苦しませる」という、目的や動機よりも手段の方に重点が置かれている。そして、その結果を得るための「手段」として「動作の相手或いは第三者の誰かを騙す」のである。その点では二語の間には「意味的なずれ」が存在するのは明白であるが、ある部分では意味的に多少重なり合うことも確かである。しかし、その重なり合う意味領域は狭い。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図　４】「騙す」を巡る意味的な主な類義語群の示す意味的な相互関係図 [6]



[6]　この図は樺島忠夫による「『ダマス』を巡る類義語群図」を参考にした。原典は『日本語はどう変わるか』、岩波書店、1981 年、p.28―29。

臺灣大學學術期刊資料庫

また、「騙す」と「陥れる」の二語の間に存在する意味的な重なり合いは、動作主が「目的・動機を達成するための手段のレベル」において、「陥らせる」は「騙す」と重なり合う。これに対して、第七に、「騙す」と「たらす」の二語の間に見出せる意味的な重なり合いに関しては、動作主が「肉体的な快楽を得るという目的・動機を達成しようと予め意図して女を騙す」点、及び、「子供をすかしたり、なだめたりする行為」という点、などにおいて、意味的に重なり合う振る舞いが観察出来る。

以上の比較分析と考察に基づいて、「騙す」及び「騙す」を巡る意味的な類義語群及び関連語群の示す意味領域の重なり合い方及び意味的に相互に関係のある点を、【図　4】として示す。

9.「騙す」を巡る類義語群に対する位相論による品格の高低に対する考察

この項においては、前述した「騙す」及び「騙す」を巡る類義語群・慣用句を含む関連語句群を、位相論に基づいて品格に関して考察する。そして、それぞれの語が表現する品格の高低にしたがって、品格の高低別に分類して、これらの語をどのような状況下においてどのように使い分けるかに関して明らかにすることを試みる。

位相とは、地域・職業・男女・年齢・階級、または書き言葉と話し言葉などの相違から起る言葉の違いを指す。たとえ同じ意味を表現していても、前述の諸要素によって、話し手による語彙の選択が異なってくる言語現象を言うものである。[7] 日本の国外において日本語を学習する外国人にとって、語彙と文体との釣り合い・品格に係わる位相論な諸要素に基づいて語彙の選択をすることは、困難な問題の一つである。

日本語の国語学における位相論の位置は、未だ明確に確立されていない。菊沢季生説によると、位相論とは国語学の一部であるべきであるとして、言語の位相差は、本質的には、全て、社会心理に由

[7] 新村出編『広辞苑』、1980 年、岩波書店、p.114。

臺灣大學學術期刊資料庫

来するという立場に立つ。[8] また、島田勇雄説によれば、それは国語学と社会学との学際的部門として位置付けられるべきであると提唱している。[9] 本稿は基本的には菊沢説・島田説に同意する立場に立つ。しかし、本稿は、島田説による「社会」が非常に特殊な共同体・集合体を含んでいて、その共同体・集合体に属する人々のみが用いる語彙の体系に即して、位相論に基づいて、「騙す」及び「騙す」を巡る類義語群並びに関連語群を分類するわけではない。本稿は、日本語の意味的な側面、及び、文や文体と語彙との釣り合い・品格の優劣に係わる位相論的な諸要素を考慮に入れて、それぞれの語が示す品格の高低に関して考察する立場を取る。

尚、本稿による品格の高低に関する判断の基準になる事柄としては、【1】判断の対象になる語が、主に文章語として用いられるのか、口語として用いられるのか、もし、口語であれば、主に、正式の場で用いられるのか、日常会話のレベルで用いられるのか、【2】男性・女性・中性によって使い分けが観察できる性向語であるか、【3】俗語であるのか、【4】実際に用いられる場合の「動作主と動作の相手」の社会的な関係、及び、用いられる場合の状況はどうか、【5】語感が、優雅であるか、感じがよいか（優しいか、相手のことを思い遣っているかなど）、感じが悪いか（その言葉を言われると、聞き手は心理的に嫌だと感じるかどうか）、【6】ニュアンスが肯定的か、否定的か、相手をおとしめようという感じがするか、などである。尚、語の品格に関しては、それぞれ優雅（品格が高い）、感じがよい（品格がやや高い）、普通、感じがやや悪い（品格がやや劣る）、感じが悪い（品格が低い）、感じが相当悪い（品格がない）のカテゴリー別に分類される。

第一に、動作主が物質的・金品上の利益を得るよりも、主に、「動作の相手の心を弄ぶ」ことを目的・動機としている場合に関する、それぞれ「幻惑する」「欺く」「迷わす」「偽る」「騙す」「たぶらかす」

8　菊沢季生『新興国語学序説』、p.388。
9　島田勇雄「位相論」『語彙論』、明治書院、p.131。

臺灣大學學術期刊資料庫

の各語の品格に関して考察する。

（28）彼はその気もないのに、私を幻惑して、恋に陥らせた。

（29）彼はその気もないのに、私を欺いて、恋に陥らせた。

（30）彼はその気もないのに、私を迷わせて、恋に陥らせた。

において、「幻惑する」「迷わす」は、同じ意味系統に属している。これに対して、「偽る」「騙す」「たぶらかす」は別の意味系統に属する。「欺く」はこれら二つの系統のどちらにも属する語で、文脈によって、意味的に近い、どちらか一方のカテゴリーに属することになろう。

「幻惑する」と「欺く」の二語の間では、二語とも主に文章語であることは同じであるが、「幻惑する」の方が「欺く」よりも、雅なニュアンスが感じられて、品格がより高い。「欺く」と「迷わす」の二語の間では、「迷わす」の方は文章語・口語の両方用いられるが、口語で用いられることが多い。そして、「欺く」の方が「迷わす」よりも、「動作主が相手を〈騙す〉思い」が主観的で強い。「迷わす」の方は、「動作の相手」が「勝手に迷っている」というニュアンスが表現される。

（31）彼はその気もないのに、私を偽って、恋に陥らせた。

（32）彼はその気もないのに、私を騙して、恋に陥らせた。

（33）彼はその気もないのに、私をたぶらかして、恋に陥らせた。

における「欺く」と「偽る」と「騙す」の三語の間では、「欺く」は主に文章語として用いられる。「偽る」は文章語・口語のどちらでも用いられる。そして、「欺く」が主に精神的な意味領域に止まっているのに対して、「偽る」「騙す」の方は「欺く」よりも動作主が物質的・金品上の利益を目的にしているニュアンスが強い。その意味では、「偽る」は「騙す」の表す概念により近いと言えよう。それでは、「偽る」と「騙す」とでは、どちらの語の品格がより高いかについて考察すれば、「偽る」の方の品格が高い。それは、「偽る」「騙す」の二語ともが文章語・口語の両領域で用いられる語ではあっても、日常会話のレベルでは「騙す」の方がより頻繁に用いられており、

臺灣大學學術期刊資料庫

「偽る」が用いられるのは稀である。「偽る」は「騙す」と比較すれば、正式な場でもちいられる語であるからである。下記の文例を見られたい。

(34)この証拠によって、被告は原告を偽って、本件で係争中である不動産の所有権を被告に移転登記させたことは明白である。

（裁判所で審議される裁判時の原告の弁護人による発言、及び判決書上の記載事項、等）

（35）？この証拠によって、被告は原告を騙して、本件で係争中である不動産の所有権を被告に移転登記させたことは明白である。

（36）あの人は本当の叔父さんに騙されて、親譲りの財産の所有権を叔父さんに移転したのだって。それが分った時は後の祭りだったそうだ。（日常会話体）

次に、「騙す」と「たぶらかす」の二語の間では、「騙す」には「なだめる」「労る」「すかす」の概念を表現できる意味特徴によって形成されており、「たぶらかす」は、「相手によかれと思って動作の相手を偽る」の意味を表現できるので、これらの二語ともが肯定的な意味合いを表現する点では同じである。しかし、「たぶらかす」を肯定的に用いる場合は「動作の相手によかれと思って、よい意味で相手を偽るが、条件としては手段・結果が相手のためによい」場合のみである。この意味では、「たぶらかす」の示す意味領域は「騙す」よりも狭いものと推察される。「たぶらかす」は「騙す」に比較すれば、「動作の相手を馬鹿にしたり下に見たりして」「甘言を用いて相手を偽る」という意味合いを含んでいて、「騙す」よりも語感の品格が多少劣ることは否めない。

関連して、「騙す」と同じ意味系統で下位に位置する「騙くらかす」と「たぶらかす」とでは、「騙くらかす」の方が語感の品格に劣る。それは、「騙くらかす」の概念が示す意味合いには、「他方面にわたって、或いは、長期間にわたって相手を偽る行為を継続してきた」

臺灣大學學術期刊資料庫

とニュアンスが含まれるからである。

また、「騙す」と「計る」の二語の間には、前項で指摘したように大きな意味的なずれが見出されるが、「計る」の示す多義的別義は多いので、「騙す」の語感が示すよりも、「計る」の語感が示す品格の方が多少高く感じられる。

次に、「かつぐ」「かたる」「たらす」は「たぶらかす」の意味系統の下位に属するが、これら三語の内では、「かつぐ」の表す概念は、「軽い気持ちで相手をたぶらかす」という意味を表すことができるが、「かたる」は、「詐称する・無断で誰かの名前を用いて第三者を騙す」という意味があるので、「かつぐ」よりも「かたる」による品格の方が劣ると、本稿では判断する。そして、これら三語の内では、「たらす」が一番品格が低い。それは、「たらす」という動作の相手は女性であり、動作主が何らかの利益を得るという目的を達成するために「性的な手段を用いる」行為、或いは、「性的な快楽を得るためという目的の下で、女性をたぶらかす行為」、などを表現する場合に用いられる語であるためである。日本社会の規範では、動作主が自己に有利になる何らかの目的を達成するために、女性を性的に騙す男性は最低だと判断される。そのために、「たらす」「たらし込む」「美人局をする」「スケこます」などの語や語句の品格については、必然的に品格が低いか、或いは、品格がないに等しいと判断されよう。

最後に、「ごまかす」と「ちょろまかす」の二語の品格の高低について考察する。

（37）　彼は、帳簿の収益に関する数字をごまかした。

（38）　彼は、帳簿の収益に関する数字をちょろまかした。

（39）　店の店員は、店の品物をちょろまかして逃げた。

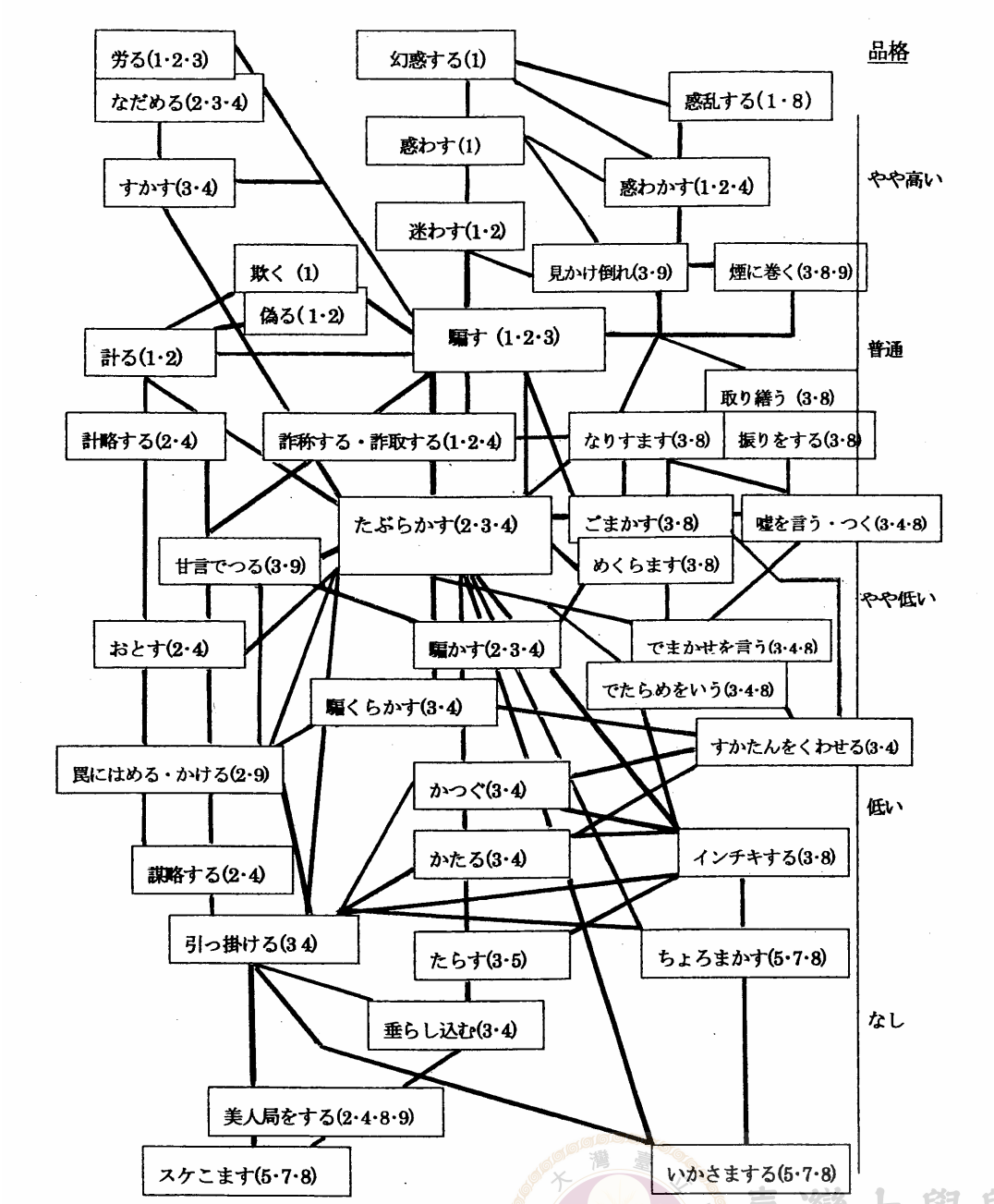
において、「ちょろまかす」の方は、数量の金品を懐に入れて、知らぬ振りをすることを指す。「ごまかす」の概念が指示対象とする物品の量や金額の額に比較すれば、「ちょろまかす」の概念が表す行為の対象は少量の物品とか小額の金額であるから、「ちょろまかす」の方

臺灣大學學術期刊資料庫

が「ごまかす」よりも品格が劣ると判断される。

以上、位相論的な立場に立って、日本語の動詞「騙す」及び「騙す」を巡る類義語群・関連語群を、日本語の意味的な側面、及び、文や文体と語彙との釣り合い・品格の優劣などの視点から分類したものを、まとめとして【図　５】に示す。

【図　５】「騙す」を巡る類義語群及び関連語群に対する位相論的分類図



臺灣大學學術期刊資料庫

尚、【図　5】に記載されたそれぞれの語の後に添加されている数字については、(1) が「主に文章語」、(2) は「主に口語」、(3) は口語の内でも「主に日常会話体」である。また、性向語に関しては、それぞれ、(4) が「中性」、(5) が「男性」、(6) が「女性」、によって主に用いられることを示す。(7) は「俗語」、(8) は「関連語・関連語句」、(9) は「慣用句」、をそれぞれ示す。

四、今後の課題

今後の課題としては、外国で日本語を学ぶ学習者の類義語に対する理解を深めるために、より多くの動詞及びその動詞の類義語群に対して意味分析をした上で、更に、位相論的に基づいて、個々の動詞及びその動詞の類義語群並びに関連語群を、文や文体と語彙との釣り合い・品格の優劣などの視点から分類して図示することが望ましい。

五、結び

以上、認知意味論に基づいて、「騙す」及び「騙す」を巡る主な類義語群に対して意味分析をし、個々の語が示すそれぞれの概念と個々の語の間に存在する意味的な相互関係について明らかにして、【図４】に示した。更に、位相論に基づいてそれぞれの語の示す品格の高低について分析・考察して、品格の高低によって分類化したものを【図　5】に図示してまとめとした。

参考資料

参考文献

池上嘉彦（1977)「意味の体系と分析」『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』、岩波書店。

―― (1993)『意味論――意味構造の分析と記述――』、大修館書店。

臺灣大學學術期刊資料庫

窪薗晴夫（1999）『語形式と音韻構造』、くろしお出版。
菊沢季生（1979）「位相論」『国語科学講座』、明治書院。
——『新興国語学序説』。
国広哲也（1992）『意味論の方法』、大修館書店。
斎藤倫明（1996）『現代日本語の語構成論的研究——語における形と意味——』、ひつじ書房。
佐藤喜代治編著（1982）『講座 日本語の語彙』、明治書院。
島田勇雄（1980）「位相論」『語彙論』、明治書院。
田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』、東京堂出版。
松本　功（2004）『語彙論的語構成論』、ひつじ書房。

翻訳書

ジョージ・レイコフ（1987）『認知意味論——言語から見た人間の心』池上嘉彦・河上誓作 他訳、紀伊国屋書店。

外国書

S.L.Tsohatzidis ed. (1990) *Meanings and Prototypes—Studies in Linguistic Categorization,* Routledge, Chapman and Hall, Inc., N.Y.
John I. Saeed (1997) *Semantics,* Blackwell Publishers Inc. Cambridge, Mass.

辞書

新村出 編 『広辞苑』、岩波書店、1980 年度版。

臺灣大學學術期刊資料庫

臺灣大學學術期刊資料庫